

# 所知障と定障

池 田 道 浩

略号

AKBh: *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan ed. (1967)

AKVy: *Abhidharmakośavyākhyā*, Wogihara ed. (1936)

## I 問題の所在

瑜伽行派によって所知障 (*jñeyāvaraṇa*) が導入される以前に「二障」といえば、煩惱障 (*kleśāvaraṇa*) と定障 (*samāpattyāvaraṇa*, 解脱障 *vimokṣāvaraṇa*) であった。観 (*vipaśyanā*) の修習によって煩惱障を断じ、無明を断除することで慧解脱 (*prajñāvimukti*) が獲得され、止 (*śamatha*) の修習によって定障を断じ、食欲を断除することで心解脱 (*cittavimukti*) が獲得される。この二つを兼ね備えることが俱解脱 (*ubhayatobhāgavimukti*, 俱分解脱) とされた<sup>(1)</sup>。

漢訳文化圏には、この心解脱の障害である定障について、所知障と同一視する伝統があったように思われる。法蔵は『華嚴五教章』で次のように述べている。

其所知障、諸趣寂者入無余時一切<sup>(2)</sup>皆断。唯此非択滅也。其余一切有断不断。慧解脱人不断、俱解脱人分有所断。謂八解脱障不染無知。修八勝解所対治故。[中略<sup>(3)</sup>] 故所知障亦許分断 (『華嚴一乗教義分齊章』大正 45, No. 1866, p. 493a12-19<sup>(4)</sup>)。

其の所知障は、諸の趣寂の者は無余に入る時一切皆な断ず。唯だ此れ非択滅なり。其の余の一切は断と不断と有り。慧解脱の人は断ぜず、俱解脱の人は分に所断有り。謂わく、八解脱の障の不染無知は八勝解を修して対治する所なるが故なり。[中略] 故に所知障にも亦た分断を許す。

ここには、俱解脱、即ち、慧解脱と心解脱とを獲得した修行者は、所知障をも部分的に断じる、という見解が示されている。慧解脱のみならず心解脱を獲得してはじめて俱解脱と呼ばれるのであるが、この心解脱に到達するためには定障を除去することが求められる。この定障がここでは所知障と質的に同一な

不染無知と解釈されており、そのため、俱解脱において、即ち、慧解脱に加えて心解脱が獲得されたときには、所知障も部分的に除去されたと解釈されているのである。

定障を不染汚無知とし、所知障に直接結びつけるこのような見解は、筆者には奇妙なものに感じられる。

所知障の基本的な存在意義は以下の通りである。煩惱障を断じ慧解脱を獲得し、また、定障をも断じ心解脱を獲得し俱解脱に到達しても、大乘仏教の側からみれば、そこには所知障が残存しており、声聞独覚は法無我を理解することはできない。所知障は大乘の優越性を示すために設定された新しい概念であり、その所知障を、大乘以前の伝統的教説である定障と結びつけることは論理的整合性がないように思われる<sup>(5)</sup>。

しかし、このような誤解の原因になるような要素もいくつか存在した。本稿の目的は以上のような状況を確認することにある。

## II 所知障とは何か

声聞独覚は煩惱障を断除し人無我を獲得することができるが、所知障を断つことはできず、所知（jñeya）である真実（tattva）を認識できない。大乘の仏菩薩だけが所知障を断除し真実を獲得できるのである。所知障は当初から曖昧模糊としたものであるが、不染汚無知（akliṣṭājñāna）、不染汚無明（akliṣṭāvidyā）、習気（vāsanā）と規定される<sup>(6)</sup>。以下の『菩薩地』では習気とも不染汚無明とも表現されている。

tatra bodhiḥ katamā / samāsato dvidvidhaṅ ca prahāṇaṃ dvidvidhaṅ ca jñānaṃ bodhir ity ucyate / tatra dvidvidhaṃ prahāṇaṃ kleśāvaraṇaprahāṇaṃ jñeyāvaraṇaprahāṇaṅ ca / dvidvidhaṃ punar jñānaṃ yat kleśāvaraṇaprahāṇāc ca nirmalaṃ sarvakleśaniranubandhājñānaṃ / jñeyāvaraṇaprahāṇāc ca yat sarvasmin jñeye `pratihatam anāvaraṇaṃ jñānaṃ / aparahaḥ paryāyahaḥ / śuddhajñānaṃ sarvajñānaṃ asaṅgajñānaṅ ca / sarvakleśavāsanāsamudghātaś cākliṣṭāyāś cāvīdyāḥ niḥśeṣaprahāṇaṃ anuttarā samyaksambodhir ity ucyate / (Bodhisattvabhūmi, Dutt ed., p. 62, ll. 3-10, Wogihara ed., p. 88. ll. 1-11)

ここで菩提とは何か。簡単にいえば二種の断滅と二種の智が菩提といわれる。そのうち二種の断とは煩惱障の断滅と所知障の断滅である。また、二種の智とは、煩惱障の断滅によって無垢となり一切の煩惱に束縛されない智と、所知障の断滅により

一切の所知に対し妨げがなく障害のない智である。別の同義語は、清浄智、一切智、無障礙智、また、一切の煩惱と習気を完全に排除し、不染汚無明を残りなく断滅した無上正等覚 [が同義語] といわれる。

### Ⅲ 定障とは何か

『俱舍論』第7章「智品」には定障についての説明がある。大乘の教説とは無関係の個所であり、当然ながら所知障との関連性を思わせる記述は存在しない。

**AKBh:** *caturvidhā prahāṇasamṣat* / ① *sarvakleśaprahāṇam* ② *atyantaprahāṇam* ③ *savāsana*  
*nāprahāṇam* ④ *sarvasamādhisamāpattyāvaraṇaprahāṇam ca* / (AKBh, p. 416, ll. 1-2)

断の円満は四種である。①すべての煩惱の断、②永遠の断、③習気をも同時の断、④すべての禅定と等引に対する障害の断である。

**真諦訳:** 断勝徳亦有四種。一④一切解脱障滅、二③一切定障滅、三①一切智障滅、四②永時滅（『阿毘達磨俱舍釈論』大正 29, No. 1559, p. 292b22-24）。

**玄奘訳:** 断円徳有四种。一①一切煩惱断。二④一切定障断。三②畢竟断。四③并習断（『阿毘達磨俱舍論』大正 29, No. 1558, p. 141b19-21）。

**AKVy:** ① *sarvakleśaprahāṇam iti traidhātuka-darśana-bhāvanā-heya-kleśocchitṭeḥ* / ② *atyantaprahāṇam ity aparihāṇitaḥ* / ③ *savāsana*  
*nāprahāṇam ity anubamdhābhāvataḥ* / ④ *sarvasamādhisamāpattyāvaraṇaprahāṇam ity ubhayato-bhāga-vimukṭeḥ* / (AKVy, p. 650, ll. 6-9)

「①すべての煩惱の断」とは三界の見 [所断] と修所断を断じるからである。「②永遠の断」とは退失のないあり方で [断じる] からである。「③習気をも同時の断」とは、[習気が] 結びついて [再び] 生じることがないからである。「④すべての禅定と等引に対する障害の断」とは俱解脱によるからである<sup>(7)</sup>。

以上のうち、AKBh と漢訳とを表にまとめると以下のようになる。

	AKBh	真諦訳	玄奘訳
①	<i>sarvakleśaprahāṇa</i> すべての煩惱の断	一切智障滅	一切煩惱断
②	<i>atyantaprahāṇa</i> 永遠の断	永時滅	畢竟断
③	<i>savāsana</i> <i>nāprahāṇa</i> 習気をも同時の断	一切解脱障滅	并習断
④	<i>sarvasamādhisamāpattyāvaraṇaprahāṇa</i> すべての禅定と等引に対する障害の断	一切定障滅	一切定障断

AKBh と玄奘訳は順番が相違するものの語句は一致する。①から④までの四つの断（prahāṇa）が説かれるが、煩惱障の断と定障の断がその内容である。AKVy では④が俱解脱に関するものと示されており、④が定障の断であることが示唆されている。一方、真谛訳では、所知障を連想させる「一切智障」という語句が使用され、③と④に解脱障と定障という名称がでる。ここにはすでに、所知障と解脱障と定障とをすべて同一視する意図があるように思われる。

#### IV 普光の解釈

この箇所について、玄奘訳『俱舍論』に対する注釈者の普光は以下のように述べる。

断円徳復有四種。一①一切煩惱障断得沢滅。二④一切定障不染無知断得非沢滅。三②即前二障断已不退名畢竟断、簡異鈍根。四③不但断煩惱并習気亦断、簡異二乗。惑之習気無有別体、但習無時説名為断。断無別体。此中亦應別説断根障等。言断定障。影顯可知以類同故。或略不説。又准此中所明。断得通於二滅。或正断徳唯是沢滅。若扱兼説通非沢滅、此文断徳扱正及兼、故通二滅。前明断徳、扱正以論故唯沢滅（『俱舍論記』大正 41, No. 1821, p. 407a18-28）。

断円の徳にも復た四種有り。一に①一切煩惱障断にして沢滅を得るなり。二に④一切定障の不染無知の断にして非沢滅を得るなり。三に②即ち前の二障の断じ已って退かざるを畢竟断と名づけ、鈍根に簡異す。四に③但だ煩惱を断ずるのみにあらず並びに習気も亦た断じ、二乗を簡異す。惑の習気に別体有ること無く、但だ習無き時を説いて名づけて断と為す。断に別体無し。此の中にも亦た應に別に根障を断ずる等を説くべし。定障を断ずと言う。影顯知るべし、類同を以つての故に。或いは略して説かず。又た此の中に明らかにする所に准じて、断は二滅に通ずるを得。或いは正断の徳は唯だ是れ沢滅のみ。若し非沢滅に通ずるを説くに、此の文の断徳は正及び兼に扱のが故に二滅に通ず。前に断徳を明らかにするは、正に扱って以つて論ずるが故に唯だ沢滅のみなり。

この注釈には問題が多い。まず、④の定障が「不染無知」と示されている<sup>(8)</sup>。これは定障を所知障と同一視する見解である。しかしながら、インド文献において定障や解脱障を不染汚無知や不染汚無明と同一視する見解は存在しない<sup>(9)</sup>。

また、普光は③習気の断について「簡異二乗」と述べ、習気を断除するのは声聞独覚の二乗では不可能であり大乘だけが習気を断除できるとする。AKBh

では想定されていなかった大乘小乗の区別が示されていると解釈しているのであるが、習気の断除によって大乘と小乗とを区別しようとするのは、この習気をも所知障と同一視する見解に他ならない。

普光が定障を「不染無知」とし、習気の除去について「簡異二乗」とした経緯は不明であるが、この普光の見解が法蔵の記述に結びついたと判断することは不可能ではないであろう<sup>(10)</sup>。

## V 結論

法蔵が述べた「俱解脱の際に所知障が部分的に断除される」という見解の根拠は明らかではないが、普光の『俱舍論記』の記述にもとづいている可能性がある。『俱舍論記』に示された見解はインド側には存在しないと思われるが、玄奘から普光へ何らかの情報が伝承された可能性も想定できるかもしれない<sup>(11)</sup>。

## 注

- (1) 慧解脱・心解脱・俱解脱についてはさまざまなヴァリエーションが存在する。以下の研究を参照。舟橋一哉「阿含における解脱思想展開の一断面」『原始仏教思想の研究』1952年、初出は1948年、pp. 204-228, 雲井昭善「原始仏教における citta の構造」『仏教と心の問題』1980年、pp. 25-51, 同「原始仏教における解脱」『仏教思想 8・解脱』1982年、pp. 81-116, 玉城康四郎「心解脱・慧解脱に関する考察」『壬生台舜博士頌寿記念：仏教の歴史と思想』1985年、pp. 295-371, コンカーラッタナラック・プラボンサック「慧解脱者は四禅を必要としないのか」『パース学仏教文化学』26, 2012年、pp. 1-13.
- (2) 原文は「一時」であるが、甲本乙本によって「一切」とする。
- (3) ここには「如瑜伽説、又諸解脱由所知障解脱所顕。由声聞及縁覚等於所知障心得解脱故（瑜伽に説くが如し、又た諸の解脱は所知障の解脱に由って顕る所なり。声聞及び縁覚等は所知障に於いて心に解脱を得るに由るが故に）」という『瑜伽師地論』の引用がある。しかしながら、この引用文には、なぜ所知障を部分的に断つことができるのかという根拠は全く示されない。原文は「又諸解脱由所知障解脱所顕。由此声聞及独覚等於所知障心得解脱（大正 30, No. 1579, p. 645c10-11）」
- (4) 鎌田茂雄『佛典講座 28：華嚴五教章』1979年、p. 423, 427, 『仏教大系：五教章第二』1923年の対応箇所は pp. 455-464.
- (5) 所知障が導入された『瑜伽師地論』においても、定障からの解脱である心解脱や俱解脱が従来どおり説明されている。「その場合、障害（āvaraṇa）には12種ある。[中略] 煩惱障とは、慧解脱心がそれから解脱する。定障とは、俱解脱心がそれから解脱

する。所知障とは、如来の御心がそれから解脱する（de la sgrib pa yang rnam pa bcu gnyis te / . . . . . / nyon mongs pa'i sgrib pa ni 'di lta ste / shes rab rnam par grol ba rnam kyis sems gang las rnam par grol ba'o // snyoms par 'jug pa'i sgrib pa ni 'di lta ste / gnyi ga'i cha las rnam par grol ba rnam kyis sems gang las rnam par grol ba'o // shes bya'i sgrib pa ni 'di lta ste / de bhin gshegs pa rnam kyis thugs gang las rnam par grol ba'o // (*Viniścayasamgrahaṇī*, D. ed., No. 4038, Zhi, 193a2-6, P. ed., No. 5539, Zi, 200a6-b3), 復次障者、有十二種。[中略] 十煩惱障、謂由彼故說慧解脫心得解脫。十一定障、謂由彼故說俱分解脫心得解脫。十二所知障、謂由彼故說諸如來心得解脫（『瑜伽師地論』大正 30, No. 1579, pp. 656a11-21）

- (6) 所知障について、本稿に関連するものとしては、拙稿「Candrakīrti の所知障解釈」『印仏研』49-1, 2000 年, pp. (112)-(115), 「不染汚無明（不染汚無知）と所知障」『印仏研』52-1, 2003 年, pp. (134)-(137) を参照されたい。不染汚の無明なのか無知なのかという点については以下の研究がある。劉宇光「所知障は無明或無知？：在東亞唯識學與印一藏中觀學之間」（上）『法鼓佛學學報』8, 2011 年, pp. 103-140, 同（下）『法鼓佛學學報』9, 2011 年, pp. 53-81, 同「東亞唯識學“所知障”理論的“未臻全知”義之解讀：以“十障”說的最後三障等概念為線索」『漢語佛學評論』2, 2011 年, pp. 87-147. また、未出版ではあるが、ネット上から「東亞唯識宗所知障（jñeyāvaraṇa）問題研究」という氏の博士論文の一部が入手できる。筆者の説も検討対象になっており極めて有益である。
- (7) 櫻部建・小谷信千代・本庄良文『俱舍論の原典研究：智品・定品』2004 年, p. 144 参照。
- (8) この見解は後代にも引き継がれ、『冠導本』にも「一切煩惱障斷」が「得沢滅」と注記され、「一切定障斷」が「不染無知、得非沢滅」と注記されている。『冠導阿毘達磨俱舍論』卷 27, 5 左。この「不染無知」とは「不染汚無知（akliṣṭājñāna）」であるが、『俱舍論』の冒頭では、真実（bhūtārtha）の認識と、それに対する障害として不染汚無知が説かれ、声聞独覚は真実（bhūtārtha）を認識できないと示されている。大乘仏教の優越性が強く意識された記述であり、内容からいえばこれは所知障を指すと思われる。「闇とは無知のことである。真実を見ることをさまたげるからである（ajñānaṃ hi bhūtārthadarśanapratibandhād andhakāram, AKBh, p. 1, l. 10）」「諸々の声聞独覚も染汚の痴を永遠に離れているから一切に対して闇を打ち破っているが、あらゆるあり方で〔闇を打ち破っているの〕ではない。なぜなら、彼ら（声聞独覚）は仏陀の特質に対して、極めて遠く離れた場所と時間とについて、また、限りない千差万別の事物に対しての不染汚無知をもっているからである（pratyekabuddhāśrāvakā api kāmaṃ sarvatra hatāndhakārah / kliṣṭasammohātyantavigamāt / na tu sarvathā / tathā hy eṣaṃ buddhadharmesv ativiprakṣṭadeśakāleṣv artheṣu cānantaprabhedeṣu bhavaty evākliṣṭam ajñānam /, AKBh, p. 1, ll. 12-13）」『俱舍論』はこの個所以外に不染汚無知に一切言及しない。『俱舍論』の作者である Vasubandhu が瑜伽行派と密接な関係にあったことが既に明らかになっている。袴谷憲昭「Pūrvācārya 考」『唯識思想論考』2001 年, 初出は 1986 年, pp. 506-520, 山部能宜「Pūrvācārya の一用例について」『九州龍谷短期大学紀要』45, 1999 年, pp. 203-217, Robert Kritzer, *Rebirth and causation in the Yogācāra Abhidharma* (Wiener Studien zur

Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 44), Wien 1999, Nobuyoshi Yamabe, “Bija theory in Vinīścayasamgrahaṇī”, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 38-2 (1990) pp. 931-929, Robert Kritzer, *Vasubandhu and the Yogācārabhūmi: Yogācāra elements in the Abhidharmakośabhāṣya* (Studia philologica Buddhica: monograph series, 18) Tokyo 2005.

普光『俱舍論記』ではこの不染汚無知について11の異説を示した後、自説として「一切有漏無染劣慧」と説く。この個所を紹介したものに小川宏「不染無知考」『印仏研』26-1, 1977年, pp. 346-349がある。『俱舍論記』の記述は筆者にとっては極めて興味深い。もともと曖昧模糊とした概念である不染汚無知が詳細に論じられ、かつ、重要な役目を負うべき「習気」が、瑜伽行派の種子薫習の理論を全く使用せずさまざまに議論されているからである。この個所の考察は今後の課題の一つである。

- (9) 定障や解脱障の具体的な内容を示す個所は多くない。『俱舍論』『随眠品』には以下の記述がある。

kāmacchandavyāpādābhyāṃ śīlaskandhaviḡhāṭaḥ / styānamiddhena prajñāskandhasya uddhatyakaukrtyena samādhiskandhasya / samādhiprajñayor abhāve satyeṣu vicikitsako bhavattīy atāḥ pañcoktāni / etasyāṃ tu kalpanāyāṃ samādhiskandhavirodhina uddhatyakaukrtyanivaranaṣya pūrvaṃ grahaṇaṃ prāpnoti / ato yathāsaṃkhyam etābhyāṃ samādhiprajñāskandhopaghāta ity apare / samādhiprayuktasya hi styānamiddhadbhayam / dharmapracicaya prayuktasya uddhatyakaukrtyād iti / (AKBh, p. 319, ll. 7-11)

貪欲と瞋恚とによって戒蘊が損なわれる。昏沈・睡眠によって慧蘊が[損なわれる]。掉挙・悪作によって定蘊が[損なわれる]。定と慧とが欠ければ[四]諦に対し不確実になるから、五つ[の蓋]が説かれたのである。[Vasubandhuの反論]しかし、そのような解釈では、掉挙・悪作は定蘊と対立するから、先に説かれることになるが[実際には逆に示されている]。故に、順序どおりにこれら[二つの蓋]によって定[蘊]慧蘊が損なわれる、と別の人々は[言う]。なぜなら、定を修習する人は昏沈・睡眠を恐れ、択法(慧)を修習する人は掉挙・悪作を[恐れる]からである(小谷信千代・本庄良文『俱舍論の原典研究：随眠品』2007年, p. 229 参照)。

また、「賢聖品」に対する Yaśomitra の注釈にも以下の文あり。

tatra kleśāvaraṇaṃ iti / kleśā evāvaraṇaṃ / vimokṣāvaraṇaṃ iti vimokṣāṇāṃ āvaraṇaṃ / tat punaḥ kāyacittayor akarmaṇyatā / yayā vimokṣāṇ utpādayaituṃ na śaknotīti (AKVy, p. 597, ll. 9-11)

このうち、煩惱障とは、他ならぬ煩惱が障害である。解脱障とは解脱にとっての障害である。またそれは身心が軽快でないことである。それがあるがために解脱を生じさせることができないのである(櫻部建・小谷信千代訳『俱舍論の原典解明：賢聖品』1999年, p. 409 参照)。

- (10) 現代の研究者にも「定障が所知障になった」という見解がある。藤田正浩「心解脱と慧解脱の展開」『滋賀文化短期大学研究紀要』3, 1993年, pp. 1-7 参照。氏は「一切智は根本智、無分別智であり、一切種智は後得智、差別智である(p. 3)」「一切智が煩惱障を断じ、一切種智が所知障を断ずることは間違ない(p. 5)」とし、結論として以下のように述べる。「『俱舍論』にも明としての慧解脱と俱解脱(慧解脱と心解脱)

が引き継がれ、煩惱障と、解脫障あるいは定障という用語が現れる。煩惱障は仏教教理の範囲内での無明の滅、解脫障・定障は渴愛の滅であった筈だが、染汚無知の断である一切智と不染汚無知の断である一切種智との関係で説明されるときには、煩惱障の滅に相当する「一切煩惱断」が仏教教理の範囲内での無明と渴愛の滅であり、解脫障・定障の滅に相当する「一切定障断」が一切所知についての無明の滅であると考えられ、瑜伽行派で説く煩惱障と所知障に対応するようになったと考えられる（p. 5, 下線のみ引用者）いささか複雑な文章であるが、単純に言えば、定障・解脫障が所知障になったという文意であろう。

- (11) 玄奘と普光との関係については以下の『高僧伝』の記述以外筆者未詳。「初奘嫌古翻俱舍義多缺、然躬得梵本。再譯真文、乃密授光多是記憶西印薩婆多師口義。光因著疏解判（初め奘、古翻の俱舍の義の多く欠くことを嫌い、然して躬ら梵本を得。再び真文を訳し、乃ち密かに光に授くるに、多くは是れ西印薩婆多師の口義を記憶するものなり。光因りて疏を著し解判す）。『宋高僧伝』大正 50, No. 2061, p. 727a9-11」西義雄氏執筆の『俱舍論記』の解題（『仏書解説大辞典』2, p. 337b）を参照した。